

つづりの声

上田藤市郎

藤樹書院を訪ねる人々に書院について説明している。先生の没後百八十年余に、大塩平八郎が書院の修復費を献じていることを話す。皮肉なことに、先生より大塩平八郎の方がよく知られている。

藤樹先生も大塩平八郎も志す所は、世の中を住みやすい所にしたいという願いだ。孔子様、朱子、王陽明も人々の福祉に視点がある。自分だけの幸福を願ってはいない。この願いが達成されるためには、昔も今も政治が大きな責任を担っている。しかし、政治家に任せておけばよいものではなく、私達一人ひとりの志、生きる姿勢が極めて重要であり、それが政治の在り方を変えることは間違いない。藤樹先生は、身分や職業を問わず、個々人の学びに的を当てて教えることに倦むことがなかった。

世界の国々でも、わが国でも、嘘ごまかし、真実の隠ぺい、開き直りなど、様々な悪徳がまかり通っているのは、やりきれない。このような現実が続くと、人々は、世間とは、政治とは、このようなもののだとして、諦めたり納得したりしてしまう。

しかし、理不尽なことが、徳を実践することよりも、価値があるというように断じてないのだから。このような確信を失わず、勇気をもって生きていくことが大切である。

「藤樹紙芝居」の紹介⑨

『新しい生活「小川村での暮らし」』

(解説)

中江藤樹先生は、年老いたお母さんを見守り、共に暮らすために二十七歳の時に大洲藩(愛媛県)での職務も身分も捨てて、藩主からの切腹命令を覚悟で小川村に帰ってきました。

そして、長い年月、家に仕えてきた従者とも、辛い別れをします。幸い、藩主や同僚藩士などの温情により事なきを得て、小川村での母子による生活を始めることとなります。

浪人となった藤樹先生は自分の勉強の傍ら、生計を立てるため、地域の人たちに酒を売る商いを始めます。門人に学問を教える時は無人販売を行いました。周りの人たちは「酒だけを持ち帰られる。」と心配しますが先生は意に介さず、「全ての人は誰かが美しい心を持っている。」と信じて、優しく見守りました。

また、藤樹先生は、農業、土木、医療と多方面にわたる知識を持っていました。その結果、小川村に限らず、広い地域の人たちから親しまれ信頼されて何かと相談を持ち込まれていたようですが、誰に対しても親切に受け答えをしました。

与右衛門さんが現在ののように「藤

樹先生」と親しみと尊敬の念を込めて呼ばれるようになったのは、後半生なのですが、紙芝居では与右衛門さんで統一しています。

藤樹先生が、小川村に帰ってから自身の勉学や、村の人たちとの関わりを通して、新たな生活に踏み出していく様子を描きました。

この紙芝居を見聞きして、子どもたちに人を信じる心や、思いやる優しい心が伝わればと願っています。

(紙芝居)

① 大洲でお城勤めをしている与右衛門さんは、小川村で一人暮らし、年老いたお母さんのことが、気がかりでなりません。

与右衛門「お城勤めを辞めて小川村へ帰らせて下さい。」



新しい生活 小川村での暮らし

と何度もお願いしているが、いまだに殿様のお許しが出ない。もう二年半も過ぎてしまった。与右衛門さんは、胸がはち切れそうな気持ちでもうこれ以上は待ちきれないと思えました。

与右衛門さんは、おじいさんの時代から働いてきた七助さんに気持ち

をうち明けました。

与右衛門「七助さん、私はもうこれ以上、お殿様からのお許しが出るのを待つことはできない。お城を脱藩して明日の朝早く、小川村へ帰ることにします。」

*脱藩＝藩主の許可を得ずに無断で藩を抜けて逃げることで捕まると切腹など重罪となる。

七助「だんな様、お一人で出発されるのは心配です。どうか私もごいっしょにお供させてください。」

次の日、まだ夜明け前の暗いうちに、与右衛門さんと七助さんの二人は住みなれた大洲の家を出発しました。

② お城からの追っ手を気にしながら、与右衛門さんは七助さんとともに、近江の小川村まで帰ってきました。



与右衛門

「七助さん、小川村まで帰って

くることができました。本当にうれしい。」

与右衛門さんは、涙を浮かべながら言いました。